

犬・猫と一緒に暮らす試み ～特養ホームにおける新たな共生～

神奈川県横須賀市
特別養護老人ホームさくらの里山科
介護職員 畠美佐子

1 はじめに

犬や猫を飼っている独居ご高齢者様が特養に入居する際、残された犬や猫が保健所に送られてしまうことがあります。保健所に送られた犬や猫の大半は殺処分となるので、それが嫌で入居を拒む方もいます。幸い次の飼い主が見つかった場合も、長年一緒に暮らしてきた犬や猫と離れるのは、ご高齢者様に大きな喪失感をもたらします。生きる気力を奪う場合もあります。この問題を何とか解決できないだろうか。家族同然の犬や猫と一緒に暮らすことによってご高齢者様のQOLは大きく向上するのではないだろうか。その思いから私達の試みはスタートしました。



2 取り組みの紹介

① 本施設の説明

平成24年4月開設。ユニット型。特養100床。ショート20床。4階建。2階～4階が居住フロアで、各階に4ユニットずつ設置。1ユニット10名体制。

② 犬・猫とご入居者様が一緒に暮らす体制

2階のユニットを犬・猫と一緒に暮らすユニットとし、3階、4階には犬、猫を入れないものとししました。ユニットは独立した構造ですので、3階、4階のご入居者様は、犬・猫と接触しません。3階、4階のご入居者様は、犬・猫嫌いでも、犬・猫のアレルギーでも大丈夫です。犬・猫ユニットのご入居者様は、犬・猫と一緒に生活を希望した方のみとししました。



犬・猫はそれぞれのユニットで完全に自由に生活しています。居室もリビングも出入り自由です。ご入居者様の部屋に寝床を置く犬・猫、ベッドと一緒に寝ている犬・猫もいます。

犬・猫の世話は職員が行います。そのために、犬・猫ユニットとも、配置基準より多いスタッフを配置しました、さらに犬ユニットには清掃・散歩を業務とするパートスタッフを1名増加配置しました。

犬の散歩ボランティアが、現在15名協力してくれています。

猫のシャンプー・爪切り・トイレ掃除のボランティアが3名協力してくれています。

③ 一緒に暮らす犬・猫の状況

2-1ユニット 犬5匹が生活

1匹：独居高齢者が飼っていた犬。飼い主がご逝去され、本施設に入居。

3匹：保健所から保護された犬

1匹：福島原発エリアに取り残されていた犬。

2-2ユニット 犬2匹が生活

1匹：ご入居者様の飼い犬。一緒に入居。

1匹：保健所から保護された犬

2-3ユニット 猫5匹が生活

2匹：独居高齢者が飼っていた猫。飼い主がご逝去され、本施設に緊急入居。

2匹：保健所から保護された猫。

1匹：福島原発エリアに取り残されていた猫。

2-4ユニット 猫5匹が生活

1匹：ご入居者様の飼い猫。一緒に入居。

1匹：ご入居者様の飼い猫。ご入居者様が亡くなった後、本施設が引き取った。

3匹：保健所から保護された猫。



④ 目的の拡大

当初はご高齢者様とその飼い犬・猫が入居することのみを目的としていましたが、開設準備を進める中で、他のニーズや社会問題に気が付き、目的が拡大しました。

目的1 ご高齢者様と一緒にその飼い犬・猫と一緒に入居できるようにする。

目的2 犬・猫がお好きなご高齢者様が、犬・猫と一緒に生活できるようにする。そのためにご入居者様の飼い犬・猫以外にユニット共有の犬・猫を飼う。

背景 犬・猫を長年飼っていた方がご高齢になると、犬・猫を残して自分が先に逝ってしまったら可愛そう等の理由で、飼うのを諦める場合が多いです。その



ような方は、再び犬・猫と一緒に暮らせるようになると、とても喜び、心身が活性化されます。

目的3 犬・猫を飼っていた独居高齢者がご逝去される等の事情で残された犬・猫を、ユニット共有の犬・猫として引き取る。

背景 保健所で殺処分される犬・猫の中には、ご逝去された高齢者に残された犬・猫や、高齢者が特養入居等の事情によりやむをえず手放した犬・猫が少なからぬ割合で混ざっているそうです。そのような犬・猫を救うことは、高齢者を救う事につながると考えました。

目的4 人の身勝手な理由で殺処分される犬・猫を減らす

背景 保険所で殺処分される犬・猫の大部分は、飼い主の依頼だそうです。それも「飽きた」「新しい子犬を飼いたいから」等の身勝手な理由が多いそうです。そのような犬・猫を救うことは、幸せな社会を作るという福祉の目的に一致すると考えました。



3 考察

アニマルセラピーのような効果を期待した取り組みではなかったのですが、結果としてご入居者様にはとても大きな効果がありました。

効果1 飼い犬・猫と一緒に入居できることによる安心
事例1-1 犬を置いていけないと特養入居を拒み、凍死が心配されていた独居のA様。犬と一緒にならんと本施設入居を納得されました。

事例1-2 独居生活できない状態だったB様。

猫と離れられないと思いつめ、体調を崩して緊急入院していました。猫と一緒に入居され、笑顔が戻りました。

効果2 精神の活性化、豊かな感情表現の復活、コミュニケーションの促進

事例2-1 高齢になってから犬を飼うことを諦めていたC様。また犬と一緒に生活できるなんて夢みたいと、犬達に取り囲まれて嬉し涙をこぼしています。

事例2-2 猫好きなD様。寂しい施設生活になることを覚悟していたのに、可愛い猫ちゃんと一緒に楽しい、入ってよかったと毎日おっしゃっています。

効果3 生活習慣の改善

事例3-1 夜が怖くて眠れなかったE様。犬と一緒に暮らすと夜が怖くなくなり、しっかり眠れるようになりました。

事例2-2 新しい猫に毎日声をかけていたF様。それが日課と役割になり、いきいき生活するようになりました

効果4 ADLの向上

事例4-1 G様は拘縮していた手で一生懸命犬を撫でているうちに、拘縮が少しずつ改善されてきました。犬のブラッシングをすることも効果がありました。



事例4-2 自走式車椅子のG様。頻繁に猫に声をかけに行くため移動距離が増え、

上肢の筋力アップと基本体力向上につながりました。

効果5 認知症の進行予防

事例5-1 認知症が進行し無表情だったH様。一緒の部屋で暮らす犬が、夜間トイレに行く時などもいつも一緒に行動してくれることにより、犬を守るべき存在として認識し、表情が豊かになり、発言が増えるなど認知症状が緩和されました。

効果6 地域交流促進

お散歩や猫の爪切りボランティアで地域の方が施設に出入りするようになりました。また、職員が犬の散歩をしていると、近隣の人から声をかけてもらえます。近所の子供達が、犬や猫と遊ぶために施設を訪れることもあり、交流は大幅に増えました。

効果7 職員のスキルアップ

職員が頻繁に犬・猫の所在確認をしています。それは職員の注意力・観察力の向上につながりました。



4 終わりに

ペットと一緒に入居できると知ったご高齢者様の感激した様子、再び犬・猫と一緒に暮らせることになったご入居者様の喜びの顔、一度は人に捨てられた犬や猫が幸せそうにご入居者様に甘える姿、それは感動的光景であり、特養ホームにおける新しい共生モデルに思えました。